

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820019

研究課題名（和文） 古英語における語順とコロケーションの關係の解明

研究課題名（英文） Collocation and Word Order in Old English

研究代表者

小塚 良孝（KOZUKA YOSHITAKA）

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：40513982

研究成果の概要（和文）：

本研究では、古英語期の散文作品における定形動詞と名詞目的語の語順の決定要因をコロケーションに着目して調査、分析した。分析対象とした文献は年代記（Anglo-Saxon Chronicle）や宗教散文（West Saxon Gospels など）などである。本調査から、コロケーションが語順に影響を及ぼしたと考えられる場合があることが明らかになり、古英語の語順研究にはコロケーションという観点も重要であることが指摘された。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to investigate the relationship between word order and collocation in Old English prose, seeking for a factor affecting the relative order of a finite verb and a nominal object. Works specifically examined include the *Anglo-Saxon Chronicle* and the *West Saxon Gospels*. This research reveals that there are cases where collocation could play an important role in the determination of word order, and suggests that it will be fruitful to study Old English syntax from this perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,320,000	396,000	1,716,000
2009年度	1,180,000	354,000	1,534,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：英語史

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：古英語、散文、語順、コロケーション

1. 研究開始当初の背景

古英語の語順は現代英語に比べて自由で多様であると言われる。また、古英語には、現代英語には見られない語順（例：SOV）が多々見られる。この、現代から見れば自由で多様

に見える古英語の語順はこれまで多くの研究者の興味を惹きつけ、数多くの研究が積み重ねられてきた。中でも、本研究が対象とする動詞と目的語の語順に関しては、国内外の様々な立場の研究者により研究されてきた。

それにより、古英語期の語の配列に関わる要因が徐々に明らかになってきた。これまで提案されてきた古英語散文における動詞と目的語の語順決定要因には、主に次のようなものがある。

- (1) 節の種類 (e.g. Mitchell 1985)
- (2) 要素の重さ (e.g. Kohonen 1978)
- (3) 情報構造 (e.g. Kohonen 1978)

節の種類と語順の関係については、例えば、古英語の従属節と等位節では定形動詞が節の末尾(または後方)に置かれる傾向があるため OV になりやすいこと、また、要素の重さとの関係については、軽いもの(代名詞や軽い名詞句)ほど動詞の前に置かれやすいことが明らかにされた。また、情報構造の観点からは、旧情報を表す目的語の方が動詞の前に置かれやすいことが指摘されている。以上のような先行研究により、古英語における語順決定の仕組みはかなり明らかになったが、全てが説明可能なわけではない。例えば、重い名詞句目的語でも SOV となったり、軽い名詞句でも SVO になる場合があるなど、上記の傾向からすれば例外的な用例が少なくない。そのような用例において語順を決定付ける要因を考察することが、古英語統語論の今後の課題の一つだと思われる。本研究以前の研究で、本研究実施者は、コロケーションがその鍵になると考えた。しかしながら、この観点からの語順の本格的な分析は、本研究実施者の知る限りでは、研究開始時においては見られなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古英語期の散文における動詞と目的語の語順の決定要因をコロケーションや定形性に着目して考察することであった。特に、古英語に特徴的な SOV という語順が使われる要因の一部を明らかにすることを本研究は目指した。

3. 研究の方法

以下のスケジュールで研究を進めた。

平成 20 年度

- (1) West Saxon Gospels の網羅的分析とデータベースの作成
- (2) 他の後期古英語期の宗教散文の分析

平成 21 年度

- (1) 後期古英語期の非宗教散文の分析
- (2) 前期古英語期の散文の分析

具体的な研究方法は、以下のとおりである。まず、West Saxon Gospels の等位節における名

詞目的語と定形動詞の用例を網羅的に収集し(計 498 例) その用例をデータベース化した。次に、このデータベースを基に、West Saxon Gospels における VO/OV の選択とコロケーションの関係を考察した。その後、West Saxon Gospels の調査結果を踏まえつつ、他の後期古英語宗教散文文献、また、それ以外の時代やジャンルの文献を調査した。以上の各調査に際しては、各校訂版テキストに加え、*A Microfiche Concordance to Old English* や古英語の電子テキスト(Dictionary of Old English Corpus)等の各種研究ツールを用いた。

4. 研究成果

- (1) West Saxon Gospels の VO/OV に関するデータベースの作成

West Saxon Gospels の等位節における定形動詞と名詞目的語の語順に関するデータベース(用例数 498 例)を作成した。本データベースの作成に当たっては、Skeat (ed. 1871-87) に収録されている Corpus 写本(Cambridge, Corpus Christi College 140)のテキストを用いた。

- (2) West Saxon Gospels における語順とコロケーションの関係の分析

(1)に述べたデータベースを利用して、West Saxon Gospels の等位節における定形動詞と名詞目的語の語順を網羅的に分析した。その結果、幾つかの注目される傾向や特徴が見出された。以下、その概要を示す。

当該文献では福音書ごとに等位節での OV 率は大きく異なる。マルコ伝とルカ伝では高く、表 1 が示すように、マタイ伝とヨハネ伝のおよそ 10 倍である。

表 1: West Saxon Gospels における定形動詞と名詞目的語の語順

OV:VO			
マタイ伝	マルコ伝	ルカ伝	ヨハネ伝
6:154	47:63	45:100	3:80
OV=3.9%	OV=42.7%	OV=31.0%	OV=3.6%

*上段は用例数、下段は OV の割合を示す

この差を、従来指摘されている語順決定要因(目的語の重さや接続詞の種類、主語の有無など)に照らしてみたが、マルコ伝、ルカ伝に OV になりやすい条件を備えた用例が特に多いわけではなかった。例えば、以下の表 2 が示すように、目的語の重さ(目的語を構成する単語数)が同じでも選択の傾向は大きく異なる。また、本文はラテン語からの翻訳であるので、その影響も考えられたが、Vulgate と比較する限り、ラテン語は語順に強

い影響を及ぼしてはいなかった。

表 2a: VO/OV と重さ (マルコ伝・ルカ伝)

重さ	OV:VO	
	マルコ伝	ルカ伝
3語以上	2:15 OV=11.8%	2:29 OV=6.5%
2語	30:37 OV=44.8%	18:55 OV=24.7%
1語	15:11 OV=57.7%	25:16 OV=61.0%

*上段は用例数、下段はOVの割合を示す

表 2b: VO/OV と重さ (マタイ伝・ヨハネ伝)

重さ	OV:VO	
	マタイ伝	ヨハネ伝
3語以上	0:23 OV=0%	0:17 OV=0%
2語	5:105 OV=4.5%	2:45 OV=4.3%
1語	1:26 OV=3.7%	1:18 OV=5.3%

*上段は用例数、下段はOVの割合を示す

また、上記用例の内、目的語が名詞一語からなる場合について、動詞と目的語のコロケーションに着目した詳細な分析を行った結果、以下のような興味深い特徴が認められた。

ルカ伝では、一部のコロケーションが繰り返し、かつ常に、OVになる。特に顕著なのは、*sunu cennnan/ eacnian* (4例) と *god(e) + 感謝や賛美を表す動詞* (9例) であった。OVの用例 25 例中、この二つのコロケーションが約半数を占めることになる。

þanc(as) don 「感謝する」はマルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝に現れるが、いずれの福音書でもOVである。OV率の高いルカ伝、マルコ伝だけでなく、OV率が極めて低いヨハネ伝でもOVとなることが注目される。ヨハネ伝で目的語が一語の用例でOVとなるのは、このフレーズのみである。このことから、*þanc(as) don* の統語的特殊性が窺える。

人名はOV率の低いマタイ伝、ヨハネ伝だけでなく、OV率の高いマルコ伝、ルカ伝でも動詞の前に置かれることはない(マタイ伝 4例、マルコ伝 4例、ルカ伝 2例、ヨハネ伝

4例)。以上の点から、この種の名詞の特殊性が示唆される。

構造と語順の関係に着目すると、マルコ伝とルカ伝では、句動詞(*phrasal verb*)構造で、OVになる割合が高いことが明らかになった。マルコ伝では7例全て、ルカ伝では7例中5例でOVである。

以上の観察結果から、コロケーションと語順の選択が結びついている可能性があることが明らかになった。

(3) Anglo-Saxon Chronicle 等における語順とコロケーションの関係の分析

後期古英語宗教散文以外の文献の分析からは、特に Anglo-Saxon Chronicle について注目すべき結果が得られた。以下、その概略を示す。なお、Anglo-Saxon Chronicle は複数の写本に残るが、調査対象としたのは、その内、以下の四写本である。

- A (Cambridge, Corpus Christi College, MS. 173)
- C (London, British Library, MS. Cotton Tiberius B. i)
- D (London, British Library, MS. Cotton Tiberius B. iv)
- E (Oxford, Bodleian Library, MS. Laud Misc. 636)

以下の報告では、それぞれ略号 (A, C, D, E) で示す。調査に使用した刊本は、Bately (ed. 1986)、O'Keefe (ed. 2001)、Cubbin (ed. 1996)、Irvine (ed. 2004) である。

sige niman などの「勝利する」を意味するフレーズと語順選択の関係

「*sige*+動詞」で「勝利する」を意味する表現は、Anglo-Saxon Chronicle では初期の記事から後期の記事まで繰り返し出現し、殆どの場合、等位節に現れる。まず、Aに着目すると、計 16 例あり、そのすべてが等位節に現れる。共起する動詞は *niman*、*agan*、*habban* の三種であるが、その年代的な分布が注目される。Bately (1980) も指摘するように、871 年までは *niman* が専ら用いられるが、それ以降の記事では *habban* または *agan* が主となる。

表 3: A における *sige* と共起する動詞

動詞	用例数	記事の年代
<i>niman</i>	10	800, 823, 837, 845, 851(x2), 853, 870, 871(x2)
<i>habban</i>	4	449, 885, 890, 893
<i>agan</i>	2	871, 885

この三種の「勝利する」を意味する表現は、語順の点でも異なる特徴が認められる。表 4

に示すように、sige niman は圧倒的に OV であるのに対して、sige habban/agan は VO/OV の選択が割れ、特に sige habban は VO に偏る。

表 4: A における「勝利する」を意味するフレーズと語順の関係

	VO:OV
sige niman	1:9
sige habban	3:1
sige agan	1:1

この三種のフレーズについては、他の写本との比較からも興味深い特徴が見出された。まず、A と同一内容の箇所を比較すると、A の 16 箇所中、下記の 4 箇所について、他の写本で相違が見られた。

449 A sige hæfdan E heofdon sige
 871 A sige namon E sige genamon
 890 A hæfdon sige C (891) sige hæfdon
 893 A hæfdon sige D ahton sige

ここで注目されるのは、語順の変化が、動詞が habban の場合 (449, 890) のみであることである。このことから、sige habban の定形性が低かったことが窺える。

A と異なる内容部分における用例は、以下の通りである。

表 5: A と異なる内容部分における sige と共起する動詞の分布

C	
agan	2 例 (998*, 等位節, OV; 1016*, 倒置, VO)
niman	1 例 (910, 等位節, OV)
D	
agan	4 例 (943, 等位節, OV; 998*, 等位節, OV; 1016*, 倒置, VO; 1066, 等位節, VO)
habban	1 例 (909, 等位節, OV)
E	
agan	1 例 (998*, 等位節, OV)
habban	1 例 (1016*, 倒置, VO)

*は同一内容

表 5 が示すように、A と異なる部分での使用には、二点特徴が見られる。一つは動詞の選択傾向で、agan が圧倒的であることである。二点目は、従来の等位節だけでなく、倒置構造でも用いられるようになっていることである。

micel wæl geslean などの「大量に殺害する」を意味する表現におけるコロケーションと語順の関係

「大量に殺害する」という意味の表現である「micel wæl + 殺害を表す動詞 (geslean など)」

も、初期の記事から後期の記事まで繰り返し現れる。以下、このフレーズに関して得られた注目される調査結果を二点示す。

-1 micel wæl geslean の定形性と特殊性

A における「殺害する」を意味する主な動詞 (ofslean, geslean, slean など) の用法を調査すると、興味深い傾向が認められる。表 6 が示すように、geslean は目的語が wæl の場合に限られ、ofslean など他の動詞は、目的語がそれ以外の語句の場合に限られる。

表 6: A における「殺害」を意味する動詞とその目的語

動詞	目的語	
	wæl	その他
forslean		1
geslean	10	
ofaslean		1
ofslean		88
slean		2

上記分布から、wæl geslean は、少なくとも A では固定的なコロケーションであったと考えられる。なお、A *Microfiche Concordance to Old English* によると、wæl は *Orosius* と *Bede* にも頻出するが、この二文献においても、共起する動詞は同様の傾向を示した。*Orosius* では geslean のみ、*Bede* では geslean または ongeslean であった。

また、A、*Orosius*、*Bede* における wæl geslean (ongeslean) の用例では、wæl に micel などの強調の形容詞が常につく。このことから、「強調の形容詞 + wæl geslean (以下 micel wæl geslean と呼ぶ)」がセットフレーズであったと考えられる。

-2 micel wæl geslean と語順の関係

micel wæl geslean は統語的にも定形性が高い。A の 10 例の内、6 例 (823, 833, 867, 871, 894, 904) が受動態、4 例 (837, 845, 851x2) が能動態で現れるが、この内、能動態の 4 例はいずれも等位節に現れ、主語は省略され、語順は OV である。

A (837) 7 þær micel wæl geslog 7 sige nom
 A (845) 7 þær micel wæl geslogon 7 sige namon
 A (851) 7 þær micel wæl geslogon 7 sige namon
 A (851) 7 þær þæt mæste wæl geslogon ... 7 þær sige namon

上記 4 箇所に対応する記事は C、D、E にも見られるが、異綴り以外の相違は見られない。

C、D、E では A と重複しない記事にも繰り返し「wæl + 殺害を表す動詞」のコロケーションは現れる。以下に示すように、特に C、D に多い。

- C 7例 (982, 992, 1001, 1054, 1055, 1066x2)
 D 5例 (948, 952, 992, 1001, 1066)
 E 2例 (992, 1001)

この内、Dの一例(952年の記事)を除いては、全て等位節に現れる。また、全ての用例において micel などの強意の形容詞がついている。その一方、これらの用例については、Aと共通部分の用例とは異なる特徴が三点認められる。ひとつは、使用される動詞が geslean だけでなく、slean、ofslean、ofgeslean と多様になること、二点目は、能動態で語順が VO/OV どちらも見られること、三点目は、能動態で主語が付与される場合があることである。ここで注目されるのは、この三つの特徴(すなわち、動詞の選択、語順の選択、主語の付与)が互いに結びついているように見えることである。つまり、表7に示したように、能動態の用例の内、geslean が用いられる4例(C 1054, 1066x2, D 948)では全て語順は OV であり、主語は付与されないが、他の動詞が用いられる場合には、全て主語が付与され、また、VO/OV のどちらの語順も見られる。

表7: Aとの重複部分以外に見られる「wæl+動詞」の語順

	VO	OV
geslean	0	4 (C 1054, 1066x2, D 948)
ofslean	2 (D 952*, E992**)	3 (CDE 1001**)
ofgeslean	2 (CD 992**)	0
slean	1 (C 1055)	0

* D 952 以外は等位節

**CDE 1001、CDE 992 は同一内容記事

以上の調査から、後期の記事になると表現の語彙的、統語的ヴァリエーションが増える一方で、初期の記事から続く micel wæl geslean というコロケーションでは、常に OV であるということがわかった。このことから、当該表現の語順の選択には、初期の記事からの連続性(定形性)が関わっていると考えられる。

(4) 展望など

本研究により、古英語散文の語順研究において、これまで重要視されなかったコロケーションという観点の重要性が示された。本研究の成果から、今後の古英語統語論研究において、とりわけ以下の二つの点が必要であると言える。

コロケーションのタイプの考慮
 West Saxon Gospels のルカ伝に顕著に見られ

たように、OV の選択は特定のコロケーションに偏っている場合がある。このような場合、コロケーションのタイプと語順の関係に着目しないと、正確な書き手の癖は見えてこない。従って、語順の分析に際しては、コロケーションのタイプに着目する必要がある。

表現の系譜の考慮

gode þancian や micel wæl geslean のように、伝統的に OV を取ると思われるコロケーションがあり、そのようなフレーズでは、その伝統(定形性)が語順に影響を与えた可能性がある。換言すれば、語順の決定が純粋に統語的な現象でない場合がありうるということになる。従って、語順の研究では、表現の系譜を踏まえ、用例を一律に扱わないことが必要であると言える。

本研究期間終了時点においても、古英語語順研究におけるコロケーションの重要性は十分に認知されていないように思われる。そうした現状ゆえに、本研究により得られた知見やデータは重要であり、古英語統語論研究の発展に寄与するものと考えられる。

以上の本研究の一部については、The Society of Historical English Language and Linguistics にて口頭発表し、国内外の研究者と意見交換を行うことができた。研究期間内に発信できなかった部分については、今後学会発表などで報告する予定である。

<参考文献>

- Bately, J.M. (1980) 'The Compilation of the Anglo-Saxon Chronicle 60 B.C. to A.D. 890: Vocabulary as Evidence.' *PBA* 64: 93-129. London: The British Academy.
- Bately, J.M. (ed. 1986) *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition*. Vol. 3: MS. A. Cambridge: D.S. Brewer.
- Cubbin, G.P. (ed. 1996) *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition*. Vol. 6: MS. D. Cambridge: D.S. Brewer.
- Healey, A. diPaolo and R. L. Venezky (comp. 1980) *A Microfiche Concordance to Old English*. Toronto: University of Toronto.
- Irvine, S. (ed. 2004) *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition*. Vol. 7: MS. E. Cambridge: D.S. Brewer.
- Kohonen, V. (1978) *On the Development of English Word Order in Religious Prose around 1000 and 1200 A.D.*. Åbo: Åbo Akademi.
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*. 2 vols. Oxford Clarendon Press.
- O'Keefe, K. O'Brien (ed. 2001) *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative*

Edition. Vol. 5: MS. C. Cambridge: D.S. Brewer.

Skeat, W.W. (ed. 1871-87) *The Gospels according to Saint Matthew, Saint Mark, Saint Luke, and Saint John in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS.* Cambridge: Cambridge University Press.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

発表者 Yoshitaka Kozuka

発表標題 Word Order and Collocation in Old English

学会等名 The Society of Historical English Language and Linguistics

発表年月日 2009年8月29日

発表場所 広島大学

[図書](計1件)

下記図書に上記学会での発表論文("Word Order and Collocation in Old English")が掲載される

著者名 Yoshitaka Kozuka

書名 The Proceedings for SHELL 2009 Hiroshima (仮題)

出版年(印刷中)

ページ数 未定

出版社 Peter Lang

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小塚 良孝 (KOZUKA YOSHITAKA)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号: 40513982